

# 現代ドイツ語における文成分の配列\*

## —発信型ドイツ語文法の試み（I）—

橋 本 兼 一

### 0. はじめに

#### 0.1 本稿の目的

理想的な言語習得とは、幼児が母語を習得する場合のように、与えられた言語事実から一般的な文法規則を学習者自らが抽出するという帰納法的な方向を取るものである。しかし、ある程度の年齢に達した後、外国語を習得しようとする場合、大抵、始めから文法規則が提示・説明され、それを実例に当てはめるといった演繹的な教授法が取られる。これは、時間の不足を始めとする様々な制約<sup>1)</sup>により、理想的な帰納的授業を実現することが困難だからである。

そのような演繹的な授業で用いられる初級レベルの文法書は従来から数多く出版されており、それを一通り終えれば、学習者は正しい単独文、つまり前後の文脈（Kontext）を考慮しない限りにおいて正しい文を作ることが出来るようにはなる。しかし、言語は常に文脈の中で用いられるものである。その時々々の文脈を考慮した上で、話者の意図を正しく伝える言語表現を生成することが出来なければ意味がない。その助けになるような、いわば発信型の中・上級向き文法書というのは、これまでの所、あまり書かれていないようである。

そこで、ドイツ語教育におけるこの穴を埋めるために、『発信型ドイツ語文法』の作成が急務となる。そのための予備作業として、筆者が書きためつつある幾つかの章 - とりわけ従来の文法書では不十分な記述しかなかった部分 - を順次本誌に発表し、関心をお持ちの先生方の御批判を仰ごう、という次第である。尚、意図的に多くの例文<sup>2)</sup>を挙げたが、それは授業での便宜を考えてのことである。

## 0.2 語順<sup>3)</sup>をめぐる問題点

現代ドイツ語の文は、英語の文に比べて、語順（文成分の配列）がかなり自由であると言われている。しかし、語順を決定する一般原則がドイツ語に存在しないというわけではないことは、次の例から明かである。

(1) Gestern haben nur die Kinder gesungen.

(2) Gestern haben die Kinder nur gesungen.

(3) Es ist so gut.

(4) Es ist gut so.

上の2組の文は各々全く同じ文成分から出来ており、(1)と(2)のペアでは nur の位置が、(3)と(4)のペアでは so の位置が僅かに違うだけである。しかし、(1)の文の nur は die Kinder に係り、「子供達だけが歌い、他には誰も歌わなかった」という意味になるのに対し、(2)の文の nur は gesungen に係り、「子供達は歌を歌っただけで、他には何もしなかった」という意味になる。また、(3)の文の骨組みは“Es ist gut”であり、so は gut を強調する副詞にすぎず（「それはとても良い」）、省略可能である。一方、(4)の文の骨組みは“Es ist so”であり、so は基本文型の構成要素であるため、省略出来ない。この場合の gut は、その基本文型が描写する事柄に対する話し手の判断を表す（「それはそういうことで結構です」）<sup>4)</sup>。

この他、(5)は、- 特別なアクセントを置いて読まない限り - 文の一部が特に強調されることのない、標準的でニュートラルな文であるが、一方(6)は、発せられる際、Eva にアクセントが置かれ、意味的にも「(私にではなく) エファに」というように Eva が強調される。

(5) Roland hat Eva die Blumen geschenkt.

(6) Roland hat die Blumen Eva geschenkt (, aber nicht mir).

この様に語順を少し変えるだけで、意味やニュアンス、時には文としての正しさまでも変えてしまうことがあるので、注意が必要である。

## 1. 単独文の構成

### 1. 1 定動詞の位置

この章では、前後の文脈から切り離された単独文における語順を扱う。先ず、文法的に正しい文を作るために従わなければならないのが、**定動詞の位置**に関する規則である<sup>5)</sup>。

- ①定動詞を**文頭**に置く → 主文：決定疑問文 (Ja/Nein で答える)、命令文
- ②定動詞を**第2位**に置く → 主文：平叙文、補足疑問文 (疑問詞を持つ)
- ③定動詞を**文末**に置く → 副文：関係文、従属接続詞に導かれる文、間接疑問文

定動詞を第2位に置くということは、文頭にはただ1つの文成分しか置かれ得ないことを意味する。但し、1つの文成分が数語から成ることや、時には副文の形を取ることもあるので、必ずしも文頭から数えて2語目が定動詞であるというわけではない。(下の例文では「文頭の1つの文成分」をイタリックで示す。)

(7) *Das Land, in dem Lukas der Lokomotivführer lebte, hieß Lummerland und war nur sehr klein. Es war sogar ganz außerordentlich klein im Vergleich zu anderen Ländern.*

(Jim, S. 3)

(8) *Und oben auf dem Berg zwischen den beiden Gipfeln stand ein Schloß.* (Jim, S. 3)

(9) *Das Land war nämlich eine Insel.* (Jim, S. 3)

(10) *Warum die Insel übrigens Lummerland hieß und nicht irgendwie anders, wußte kein Mensch.* (Jim, S. 4)

(7) の前半の文の文頭においては、*das Land* という1格名詞に *in dem...* 以下の関係文が係っており、それ全体でこの文の主語をなしているため、定動詞は9語目に現れる。(7) の後半の文では、その *das Land* を受ける主語代名詞 *Es* が文頭の位置を占めているので、定動詞は2語目である。(8) の文頭には「その山の上の方の二つの頂上の方に」という状況語が現れており、定動詞は10語目である。(9) の文頭は、(7) と同じく *das Land* であるが、修飾語句が無いので、定動詞は3語目に現れている。(10) では、目的語の機能を果たす副文が文頭に現れており、定動詞は11語目となっている。文頭に現れているこれらの成分の内容を単純化し、代名詞または副詞と置き換えてみると、「定動詞第2位」であることがよく判るであろう。

(7a) *Es hieß Lummerland und ...*

(8a) *Da stand ein Schloß.*

(10a) *Das wußte kein Mensch.*

### 1. 2 「重いもの程、後ろに置かれる」

定動詞以外の文成分も好き勝手に並べてよいというわけではなく、一般的には「重いもの程、後ろに置かれる」という原則に従って配列される。以下、この原則を詳しく検討してゆこう。

**規則 I** : 主文においては、定動詞と密接に結び付く要素は文末に置かれ、第 2 位、或いは文頭を占める定動詞と共に枠構造を形成する。枠を閉じる要素を「動詞第二成分」と呼ぶ。

副文においては、その先頭に現れる関係代名詞や従属接続詞と、文末に置かれる動詞群が枠を作る。(以下、主に主文を例として論じる。)

(主文の) 文末で枠を閉じる役割を果たす要素(動詞第二成分)には、各種の助動詞と結ぶ過去分詞・不定詞、分離前綴りの他、**述語内容語**(Sie ist schön/Studentin における波線部) や、**機能動詞結合**において実質的意味を担う名詞句・前置詞句の部分(etwas aufführen → etwas zur Aufführung bringen; anerkannt werden → Anerkennung finden における波線部) も含まれる。

- (11) Eva hat Michael in den Kindergarten gebracht.
- (12) Im Deutschen werden alle Substantive groß geschrieben.
- (13) Für dich werde ich alles tun.
- (14) Ich wollte gestern mit dir trinken gehen.
- (15) Sie brauchen ab morgen nicht mehr zu kommen.
- (16) Die Vorlesung fängt heute ausnahmsweise um 1 Uhr an.
- (17) Ich bin seit drei Jahren an der Doshisha-Universität tätig.
- (18) Das Gesetz fand auf diesen Fall keine Anwendung.  
(= Das Gesetz wurde auf diesen Fall nicht angewendet.)
- (19) Mein Wunsch ging erst nach vielen Jahren in Erfüllung.  
(= Mein Wunsch erfüllte sich erst nach vielen Jahren.)

(11) から (15) は助動詞と過去分詞・不定詞から作られる枠構造、(16) は基礎動詞と前綴りから成る枠構造、(17) は sein と述語内容語による枠構造、(18) は機能動詞 finden と実質的な意味を担う名詞 Anwendung から成る枠構造、(19) は機能動詞 gehen と実質的な意味を担う前置詞句 in Erfüllung が作る枠構造である。特に (17) 以下の例は、一般的な枠構造の説明の中では扱われないことも多い<sup>6)</sup>が、この様に捉えることにより、

語順に関する他の現象にも説明がつく - 3章を参照 - ので、妥当なものと思われる。

この枠構造という観点から、ドイツ語の主文を幾つかの場 (Feld) に分割すると、理論的には、およそ次の様なモデル化が可能となる。

(20)

前域	定動詞	中域	動詞第二成分	後域
----	-----	----	--------	----

但し、実際の文においては、ここに挙げられた全ての場が占められるわけではない。

複数の文成分相互の配列法を説明する以下の規則Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴは、専ら中域に関するものである。前域にはただ1つの文成分しか現れ得ないので、配列法は問題とならないが、どの成分をそこに置くかという問題がある。これについては「2. 談話における文の構成」を参照。また、後域については「3. 枠の短縮」で扱う。

**規則Ⅱ：文成分の標準的配列 (基本語順 unmarkierte Abfolge) は、〈1格主語 → 3格目的語 → 4格目的語 → 2格目的語 → 前置詞付き目的語〉である。**

**規則Ⅲ：修飾語句を伴ったり、前置詞に支配されることにより長くなった成分は、後ろに置かれる。**

既に見たように、文成分が取り得る形は様々である。代名詞1語だけの場合もあれば、冠詞と名詞だけのシンプルな名詞句の場合もあるし、付加語形容詞、2格の名詞、分詞句、関係文等の修飾語句を伴って長くなることもある。また一般に、前置詞付きの名詞句は、格変化しただけの名詞句に比べて長い。そして、ある特定の文成分が強調や情報伝達上の重要性 - 後述 - を持たない場合は、短い成分がより前の方に置かれ、長い成分がより後ろの方に置かれる。これが**規則Ⅲ**の意味するところである。

(21) Ich werde ihm wohl bald einmal die Wahrheit sagen müssen.  
(Jim, S. 16)

(22) (Jim aß die Zahnpaste auf,) statt sich damit die Zähne zu putzen. (Jim, S. 17)

(23a) Mehr als 14 Millionen Touristen verbringen hier ihre Ferien.

(23b) Sie verbringen aber auch gerne ihre Ferien in den schönen Landschaften Deutschlands.

(24a) Michael hat seinen Kindern ein neues Buch von O. Preußler geschenkt.

(24b) Michael hat ihnen ein neues Buch von O. Preußler geschenkt.

(24c) \*Michael hat ein neues Buch von O. Preußler ihnen geschenkt. <sup>7)</sup>

(24d) Michael hat es seinen Kindern geschenkt.

(24e) \*Michael hat seinen Kindern es geschenkt.

(23a) と (23b) には、同じ動詞に対して同じ目的語が現れている。更に、場所を表す状況語が現れている点も同じであるが、(23a) ではこの状況語が単一の副詞である為、目的語の前に置かれている。一方、(23b) では、状況語が前置詞句であり、しかも修飾語を伴い目的語より長くなっている為、目的語の後ろに置かれたのである。(24a) から (24e) には、3 格目的語と 4 格目的語が現れているが、これらの文におけるこの 2 種類の目的語の配列は、規則 II で見た格のランキングと、それぞれの成分の長さが決定している。尚、文中の 3 格、4 格目的語が共に人称代名詞である場合は〈4 格 → 3 格〉の順になる。人称代名詞は、大抵の場合、4 格 - es - より、3 格 - ihr, ihm, ihnen - の方が長いからである。

(24f) Michael hat es ihnen geschenkt.

(24g) \*Michael hat ihnen es geschenkt.

文中の 3 格、4 格目的語が共に名詞である場合は、〈3 格 → 4 格〉の順が標準的であるが、これについては規則 II 及び規則 V を参照のこと。

更に規則 III は、代名詞による目的語（特に sich）や短い副詞が、名詞で表された主語より前に置かれることがしばしばあるという事実も説明する。但し、これは必ずしもそのような語順を取らなければならないというわけではなく、名詞主語の後ろに代名詞目的語が現れることもある - (26) と (27) を比較参照 -。

(25) Hat Ihnen der Kalle den Brief nicht gebracht? (Oma, S. 55)

(26) Nach dem Essen setzte sich Oma an die Nähmaschine, ...  
(Oma, S. 18)

(27) Wenn die Oma sich wusch, ... (Oma, S. 20)

規則Ⅳ：情報伝達上、重要な成分 - つまり強調したい成分や新しい情報を担う成分 - は後ろに置かれる。

上の規則Ⅱ・Ⅲを踏まえた上で、敢えてそこから逸脱して、中域の後方に移された成分は、強調・重視される。(当該の成分を太字で示す。)

(28a) Gibst du auch den Kindern das Geld?

(28b) Gibst du das Geld auch **den Kindern**?

(29) Wozu ist denn in einem so kleinen Land **eine Lokomotive** notwendig? (Jim, S. 4)

(30a) Die Bank hat in Freiburg eine neue Filiale eröffnet.

(30b) Die Bank hat eine neue Filiale **in Freiburg** eröffnet.

(28a) は規則Ⅱの基本語順に従った文構成を取っているが、(28b) では基本語順からの逸脱が見られ、3格目的語 den Kindern が4格目的語より後ろに置かれている。それにより、例えば「自分の子供だけでなく、その子供達にまでも」という強調のニュアンスが感じられる。(29) は規則Ⅲからの逸脱である。つまり、主語 eine Lokomotive より状況語 in einem so kleinen Land の方が長いにもかかわらず、主語を状況語の後ろに置くことにより、これを強調し「こんな小さな国によりにもよって機関車なんか」というニュアンスを伝えている。また、(30a)・(30b)において、(30a) は規則Ⅲに従っているのに対し、(30b) では状況語 in Freiburg がより長い目的語 eine neue Filiale の後ろに置かれている。これは当該の状況語を強調したいが為である。

尚、強調という現象を問題にする場合、言及しなければならないのが文アクセントである。文成分が規則Ⅱの基本語順に従って配列されている場合は、どの成分に文アクセントを置くことも可能であるが、基本語順から逸脱して後方に移された成分は文アクセントを担わなければならない<sup>8)</sup>。それ故、(28b) は必ず下線部に文アクセントが置かれる。

また聞き手にとって新しい情報を担う成分は、旧情報を担う成分より後ろに置かれる。例えば、(31) は、疑問文(31a)に対する答であり、ein Buch が新しい情報を担う成分であるため、後ろに置かれている。同様に(32) は、(32a)に対する答であり、seinen Eltern が新しい情報を担う成分であるため、後ろに置かれている。

(31) Michael hat seinen Eltern ein Buch geschenkt.

(31a) Was hat Michael seinen Eltern geschenkt?

(32) Michael hat das Buch seinen Eltern geschenkt.

(32a) Wem hat Michael das Buch geschenkt?

尚、情報の「新・旧」と「既知・未知」とは必ずしも一致するものではないことに注意すべきである。(32)の seinen Eltern は既知の概念であるが、ここでは(32a)の疑問文に対する答として新情報を表している。つまり、ある情報が新であるか旧であるかというのは、談話の中でのみ決定される素性、即ち前後の文脈から与えられる素性である。一方、既知であるか未知であるかは、文成分それ自体に備わる素性であり、定冠詞や代名詞が既知の概念を表す等、当該の成分の形式から読み取ることが出来る。とは言え、多くの場合、未知の概念が新情報を担い、既知の概念が旧情報を担い易いというのも確かである。

#### 規則V：その他（意味に関するもの）

文中の3格、4格目的語が共に名詞である場合、〈3格→4格〉の順になる。ここでは、間接（3格）目的語より直接（4格）目的語の方が意味上、重要であるということが1つの理由となっている。もう1つの理由として考えられるのは、「相手」を表す3格目的語には、大抵の場合「人」を意味する名詞が現れ、4格目的語には「物」を意味する名詞が現れ、そして〈人→物〉という順序が一般的であるということである。

(33) Der Briefträger reichte dem König das Paket durchs Fenster hinein. (Jim, S.10)

(34) Marion hat gestern ihrem Vater einen langen Brief geschrieben.

(35) Alfred hat seinem Sohn das gefährliche Spielzeug weggenommen.

〈人→物〉という順序が一般的であることを証明する例として、4格目的語を2つ取る動詞を挙げよう。この場合、「人」を表す4格の方が、「物」を表す4格より先に置かれ、その逆は許されない<sup>9)</sup>。

(36) Meine Frau lehrt die Studenten Deutsch.

「人」の4格→「物」の4格

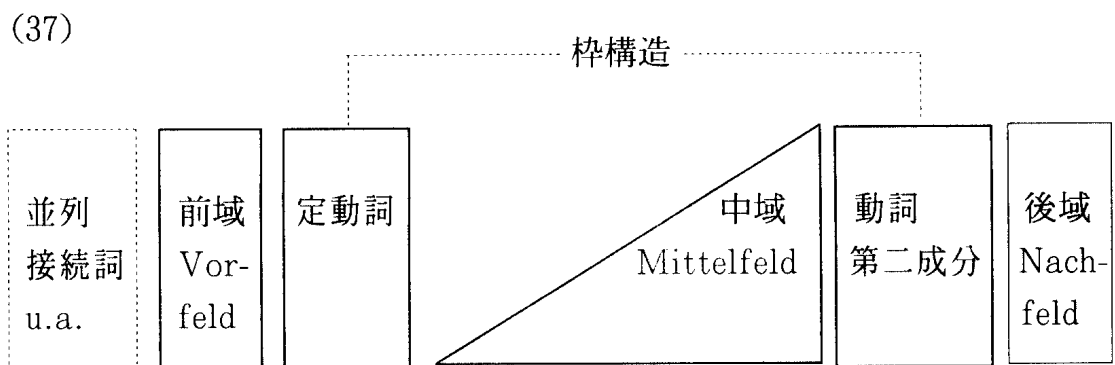
(36a) \*Meine Frau lehrt Deutsch die Studenten.

「物」の4格→「人」の4格



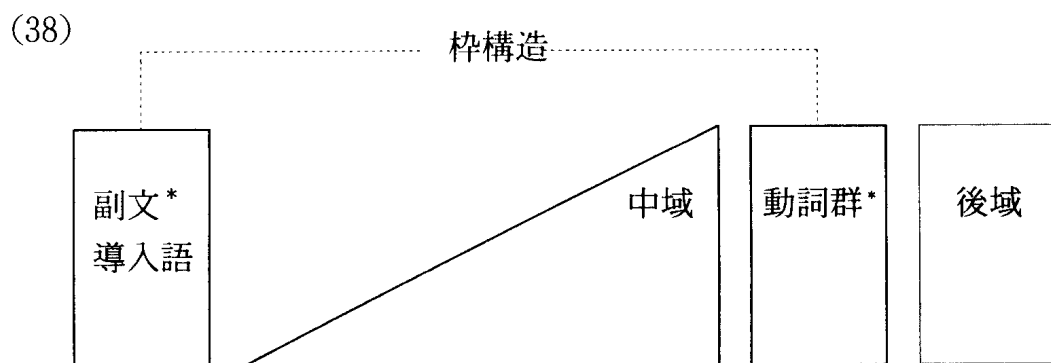
### 1.3 まとめ

以上の説明に基づいて図(20)を精密化すると、定動詞第2位の主文は、次の様に図式化される。



また、定動詞第1位の主文の場合は、必然的に、前域の部分が無くなる。

副文においては、副文導入語と文末の動詞群が枠を形成するため、以下のように図式化される。

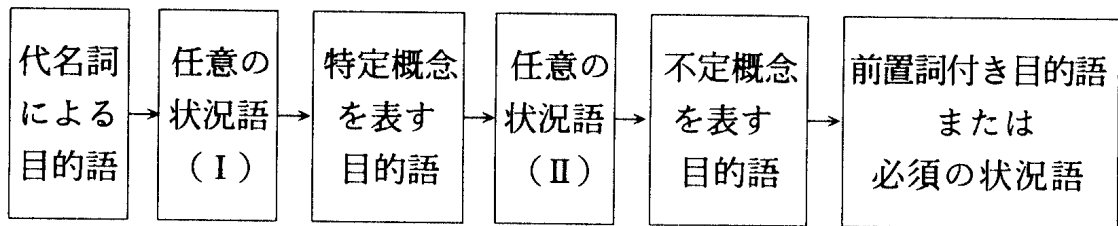


\* 副文導入語：関係代名詞、従属接続詞（間接疑問文を導く疑問詞を含む）

\* 動詞群：（動詞第二成分 + ）定動詞

中域における語順を決める原理をまとめよう。情報量から言えば〈旧情報→新情報〉となり、意味に関して言えば〈人→物〉となり、形の上から見れば〈短い成分→長い成分〉となり、次のように図式化出来る。

(39)



(39) の図について：

- ①**任意の状況語**と**必須の状況語**の区別については、Engel/Schumacher (1978 : 18ff.)、橋本 (1985 : 2ff.)<sup>10)</sup>を参照。
- ②**任意の状況語 (I)** の位置に現れるのは、「時」を表す副詞・前置詞句、「場所」を表す副詞である。この位置の内部では、〈時 → 場所〉という順序が標準的である。
- ③**任意の状況語 (II)** の位置に現れるのは、「場所」を表す前置詞句、「原因」を表す副詞・前置詞句、「様子」を表す副詞・前置詞句である。この位置の内部では〈場所 → 原因 → 様子〉という順序が標準的である。
- ④「方向」を表す状況語は - 省略されることもあるが - 全て**必須の状況語**と見なされ、中域の末尾に置かれる。

(40) Der IC 324 kam heute wegen eines Unfalls mit Verspätung in Mainz an.

- ⑤**前置詞付き目的語**と**(前置詞付き)状況語**とは異種の文成分であるので、注意が必要である。前置詞付き目的語とは、動詞が要求する特定の前置詞句を指す。この場合の前置詞は、状況語の場合と異なり、他の前置詞と交換することが出来ず、又、前置詞自体の意味がほとんど感じられず、「…を」「…に」というように、名詞と動詞を繋ぐだけの役割しか果たさない。

(41) Ich warte in der Bibliothek auf meine Freundin.

(41) には2つの前置詞句が現れているが、auf meine Freundin が前置詞付き目的語、in der Bibliothek が状況語である。つまり、前置詞付き目的語における前置詞 auf は、他の前置詞と交換不可能であり - (41a) -、また、この文の中では「…の上」という本来の意味が全く感じられず、目的語 meine Freundin「僕のガールフレンドを」を動詞に接続する役割を果たすだけである。一方、状況語が伴う前置詞

は、他の前置詞と交換可能であり - (41b)-、「図書館の中で・前で」という様に、それぞれの前置詞の意味もはっきり感じられる。更に、前置詞付き状況語の代わりに、前置詞を含まない単一の副詞を用いることも可能である - (41c) -。

(41a) \*Ich warte in der Bibliothek an meine Freundin.

(41b) Ich warte vor der Bibliothek auf meine Freundin.

(41c) Ich warte hier auf meine Freundin.

- ⑥**特定 (definit) 概念を表す目的語**というのは、特定化された（既知の）概念を表す目的語の総称であり、定冠詞付きの名詞の他、指示代名詞や所有冠詞を伴う名詞、無冠詞であるが固有名詞なども含む。
- ⑦**不定 (indefinit) 概念を表す目的語**というのは、まだ特定化されていない（未知の）概念を表す目的語の総称であり、不定冠詞付きの名詞の他、無冠詞の名詞も含む。
- ⑧**特定度の等しい名詞句相互の配列は、〈1 格主語 → 3 格目的語 → 4 格目的語 → 2 格目的語 → 前置詞付き目的語〉**という基本語順に従う - 規則Ⅱ参照 -。

語順を決定するこれらの諸規則が相互に抵触し合って齟齬をきたすことはあまりないと言えよう。むしろ、各々の基準が互いにその正当性を裏付け合っているのである。旧情報（既知の概念）は大抵代名詞化されるため、必然的に短い成分になり、一方、新情報（未知の概念）は名詞の形で現れ、しかも不定冠詞を取ることが多いため、長い成分になるからである。

## 2. 談話における文の構成（特に前域の機能について）

1. で見た諸規則に従えば、文法的に正しい文を作ることが出来る。しかし、文法的に正しい文を作ったからといって、自分が意図した事が相手に正確に伝わるとは限らない。つまり、談話の脈絡から切り離された単独の文 - 例えば文法書の例文 - としては問題が無くても、談話の中で使われる文としてはおかしい、ということがしばしばあるからである。

それ故、以下に、談話における適切な文の構成方法を、特に前域（文頭）の機能に着目しながら論じることにする。

## 2. 1 前文との関連付け

コミュニケーションは、話し言葉であれ書き言葉であれ、既に知られている事柄をベースとして、その上に新しい情報を積み上げる、という形で進められる。既知の事柄ばかりを述べていたのでは話しが先に進まないし、また、何の前触れ（旧情報）も無しに、突然新しい話題（新情報）を持ち出されたら、何のことだか判らない。それ故、円滑なコミュニケーションを行うためには、前に述べ（られ）た事を受け成分を発話の起点-つまり前域-に置き、それを糸口として新しい情報を伝えるという手順を取らなければならない<sup>11)</sup>。前に述べた事を受け、次の発話の出発点となるのは、具体的には *da*, *dann*, *da(r)*+前置詞、指示代名詞など、前方照応の機能を持つ (anaphorisch) 成分である。(下の例では、これらの前域成分が照応する要素をイタリックで示す。)

- (42) Das Auto hielt, der Mann stieg ein, *das Auto fuhr weiter*.  
Doch da saßen die Jungen schon in einem anderen Auto, ...  
(Emil, S.94)
- (43) *Manchmal fragte den Franz jemand: "Wen magst du denn am allerliebsten auf der Welt?"* Dann antwortete der Franz: "Den Josef!" (Franz, S.20)
- (44) Und dann begann sie *den Artikel* zu lesen. Darüber stand in Riesenbuchstaben: **Ein kleiner Junge als Detektiv!**  
(Emil, S.156)
- (45) Es war einmal *eine alte Geiß*, die hatte sieben junge Geißlein, ... (KHM-5)
- (46) "Mensch, *die Idee* ist hervorragend!" rief Gustav begeistert.  
"Das mache ich!..." (Emil, S.79)
- (47) Er fand, daß Lukas *ein sehr kluger Mann* war. Mit so einem Freund konnte eigentlich nicht viel schiefgehen. (Jim, S. 30)
- (48) *Aber mit geschlossenen Augen sah er gar nichts mehr*. Also konnte es wohl doch kein Traum sein. (Jim, S. 34)

その他、時間や地名は誰もが知っている一般的知識と見なされるので、話し手・聞き手両者に共通の基盤となり得る。それ故、特に時・場所の状況語は、前文との関連が無くても、話しの糸口として前域に置かれることが多い。

- (49) Am Muttertagsmorgen wachte der Franz sehr früh auf.  
(Franz, S.54)
- (50) Aber im Laufe der Jahre wuchs er heran und wurde ein richtiger Junge, ... (Jim, S. 16)
- (51) An der Zimmertür stand der Josef und lachte auch.  
(Franz, S. 56)

## 2. 2 主題 (Thema) の取り立て

前域が持つもう一つの、そして極めて重要な機能として、主題 (Thema) の取り立てがある。ここで言う主題とは、「...に関して言えば」という様に、文の叙述が対象とする範囲を表す部分である<sup>12)</sup>。つまり、主題の取り立てとは、多くの物・事柄の中から1つの事物を取り出し、その文の主題として提示するということである。それ故、当該の成分は必然的に、他との対比というニュアンスを帯びる。また、それにより2.3で扱う強調との境界が必ずしも明確でなくなる場合も多い。

- (52) Zu einem Mann, der ihn nicht für ein Mädchen hielt, hatte der Franz Vertrauen. (Franz, S. 31f.)
- (53) “Und wo, bitte, ist der Eislaufplatz?”, fragte der Franz.  
“Eislaufplatz gibt es hier keinen”, sagte der Kiosk-Mann.  
(Franz, S. 30)
- (53a) Es gibt hier keinen Eislaufplatz.
- (54) Wein trinke ich gern, aber Whisky mag ich nicht so sehr.

例えば(52)は、「自分を女の子だと見なさない人についてはどうかと言うと、信頼を置く(が、それ以外の人には信用しない)」という意味である。(53)のキオスク店員の言葉は「他の物なら色々あるが、話題となっているスケート場(だけ)は無い」というニュアンスを伝えている。この事は、主題化を伴わない(53a)の文と比べてみるとより明かになるであろう。

更に、本来なら(主文の)文末に置かれるべき動詞第二成分を前域に移し、これを主題化することも可能である。

- (55) Aber geheult hatte er keine Sekunde. (Emil, S. 57)
- (55a) Aber er hatte keine Sekunde geheult.
- (56) Nein, bezahlen mußt du mich lassen. (Emil, S.142)
- (56a) Nein, du mußt mich bezahlen lassen.

(57) Noch einmal in die Stadt gehen will ich erst am Nachmittag.  
(Beleg nach Weinrich 1993 : 76)

(57a) Ich will erst am Nachmittag noch einmal in die Stadt gehen.

(57b) \*Noch einmal in die Stadt will ich erst am Nachmittag gehen.

(55) は「泣きわめくなどということは1秒たりともしなかった」、(56) は「お勘定 (に関して) は私に任せてもらわなくちゃ」というニュアンスである。一方、主題化されていない(55a)は「1秒たりとも泣きわめかなかった」、(56a)は「私に払わせてくれなくちゃ」という意味を表す。また(57)の様に、動詞第二成分だけでなく、それに直接支配される成分を一緒に前域に移し、主題化することも可能である。(57)は「もう一度街に出るのは午後になってからにしたい」というニュアンスを伝え、(57a)は「午後になってからもう一度街に出るつもりだ」を表す。

### 2. 3 強調

ある文成分を前域に移し、アクセントを置くことによって、その成分を強調することが出来る。但し、主語及び状況語を前域に置いても強調にはならない。状況語は、2. 1で述べた通り、一般的に知られた知識として発話の出発点をなすが故に、前域に置かれやすいからである。また、前域の主語が強調効果を持たないのは、英語と同様、〈主語 → 定動詞〉という語順がやはり最も標準的と見なされるからである。ある統計調査によれば、主語が前域を占める割合は平叙文全体の6割、状況語が3割であり、それ以外の文成分が前域に現れるのは1割にすぎない<sup>13)</sup>。本節においては、この残りの1割が問題となる。

(58) Ein feines Photographiergesicht hat der Herr. (Emil, S. 86)

(59) Eine schneidige Uniform hat er an. (Emil, S. 111)

(60) Hundertmal stach er sich beim Nähen in die Finger.  
(Franz, S. 52)

また、2. 2同様、文末に置かれるべき動詞第二成分を前域に移し、強調することが出来る。

(61) Schön ist die Jugend. (Hermann Hesse)

(62) ... hören die Schmerzen bald auf. Nur liegen mußt du ein paar Tage. (Oma, S. 69)

(63) ... , ich glaube es auch nicht, nur wissen mußt du es.

(Oma, S. 105)

(64) Geholfen hat mir bisher niemand, ... (Oma, S. 58)

(65) Und angespuckt hatte er sie. (Franz, S. 13)

(62) は「(痛みはすぐに消えるけど、) 2～3日の間寝てはいなければいけないよ」、(63) は「お前がその事を知っておくことは必要だよ」、(64) は「今まで誰も助けてはくれなかった」を表す。

枠構造を持たない文においてこの様な形で動詞成分を強調したい場合は、*tun* を第2位に置く。

(66) Kaufen *tue* ich es natürlich nicht.

(67) Rauchen zum Beispiel *tat* er auch nicht. (Dürrenmatt; nach Erben 1980 :121)

尚、主語を強調したい場合は、前域が空白にならないように、仮主語 (Platzhalter) の *es* を置いてから、当該の名詞句を文の後ろの方に移動させる<sup>14)</sup>。

(68) *Es* kam gestern meine Schwester.

(69) *Es* geschahen vor drei Tagen zwei Autounfälle.

それにより動詞の表す動作・事象が主題となり、(68) は「昨日誰が来たか」というと、私の妹である」、(69) は「3日前に何が起こったか」というと、2件の自動車事故である」という様に、それぞれの主語が伝達の要 - つまり *Rhema* - になるので、強調されることになるわけである。

## 2. 4 日本語との対照

主題の取り立てという機能を日本語はどのような言語手段を用いて果たすのかを検討してみると、係助詞「は」が思い当たる。実際、2. 2 及び 2. 3 で挙げた例文に対応する日本語訳には、当該の成分が「は」を伴って現れている。

「は」の基本的な機能は、主題を提示して叙述の範囲を決めるということであるが、そこから、2つ (以上) の主題を対比的に示す、強調する等の働きが出てくる<sup>15)</sup>。この他、譲歩を表すこともある。

## 2. 4. 1 主題を提示して叙述の範囲を決める

- (70) 僕は学生です。 ‘Ich bin Student.’
- (71) 象は鼻が長い。 ‘Elefanten haben lange Rüssel.’
- (72) ハイデルベルクは去年の夏に行きました。  
‘Nach Heidelberg bin ich im letzten Sommer gefahren.’
- (73) コーヒーは日に3杯くらい飲みます。  
‘Kaffee trinke ich täglich etwa drei Tassen.’
- (74) 今日は良い天気だ。 ‘Heute haben wir schönes Wetter.’
- (75) 絵は何を教えたってん。(『兎』S. 34)  
‘Was das Malen betrifft, was hast du ihnen beigebracht?’
- (76) たべるものはだいたい、ちゃんとしたものをたべさせております。  
(『兎』S. 126)  
‘Was das Essen betrifft, so gebe ich ihm im großen und ganzen etwas Ordentliches.’

## 2. 4. 2 2つ(以上)の主題を対比的に示す

主題提示との境界が必ずしも明確ではないので、ここでは対比される2つの要素が言語的に顕在化している例だけを挙げる。

- (77) ワインは好んで飲むけど、ウイスキーはあまり好きじゃない。  
‘Wein trinke ich gern, aber Whisky mag ich nicht so sehr.’
- (78) 学校ではクラスの40人の子供の世話をし、家では2人の息子の母として...  
‘In der Schule betreut sie die 40 Kinder ihrer Klasse, und zu Hause muß sie als Mutter von zwei Söhnen ...’
- (79) フラックにとっては、1時間の運動でじゅうぶんだったし、...  
しかし、グリックにとってははどうなのだろうか。(『グリック』S. 26)  
‘Für Flack reichte eine Stunde Bewegung, ... aber wie war es für Glick?’
- (80) (蠅についての) ほかのことはなんでも知っているけど、名前だけは... わからんから... (『兎』S. 90)  
‘Von anderen Sachen (über Fliegen) weiß er alles, aber nur die Namen kennt er nicht ...’



### 2. 4. 3 強調

- (81) 私はいやです。 ‘**Ich** will es nicht.’
- (82) この点ではあなたの言うことが正しい。  
 ‘**In dieser Hinsicht** haben Sie recht.’
- (83) 飢えだけはなんとかくいとめることが出来た。(『グリック』  
 S. 248)  
 ‘**Das Verhungern** konnten wir irgendwie vermeiden.’
- (84) 君とはもう会わないだろう。 ‘**Dich** werde ich nie sehen.’
- (85) 涙なくしては語れない。 ‘**Ohne Tränen** kann man es nicht  
 erzählen.’
- (86) 歩いては行けないんだ。(『グリック』 S.51)  
 ‘**Zu Fuß** kann man nicht gehen.’

### 2. 4. 4 譲歩

- (87) 元気ではあるけれど、ほとんど暇がない。  
 ‘Es geht mir schon gut, aber ich habe sehr wenig Freizeit.’
- (88) いちどはちゃんとすわるけれど、3分間とじっとしてられない。  
 (『兎』 S.137)  
 ‘Er setzt sich zwar einmal ordentlich hin, aber er kann  
 nicht länger als drei Minuten sitzen bleiben.’

### 2. 5 まとめ

ドイツ語の前域と日本語の係助詞「は」を対照してみると、各々が持つ様々な機能のうち、主題の取り立て、対比、強調という基本的な部分で一致することが明らかになった。しかも前域・「は」により強調を受けた文が否定されると、部分否定になる点でも日本語とドイツ語は一致している。

それ故、日本語の文をドイツ語に移す際には、「は」の付いた要素に対応するドイツ語の要素を前域に置けば、日本語の持つニュアンスをそのままドイツ語の文においても表現することが出来るのである。

また、ドイツ語の前域が前文との関連づけを行うこと、及び日本語の「は」が譲歩を表すことは、それぞれの言語に固有の現象であり、この部分での互換性は無いことが分かった。

本節での考察は、以下の様な表にまとめることが出来よう。

(89)

	ドイツ語：前域	日本語：「は」
前文との関連づけ	○	×
主題の取り立て	○	○
対比	○	○
強調	○	○
譲歩	×	○

### 3. 枠の短縮（後域について）

枠構造はドイツ語の構文法の際立った特徴であるが、その一方で、枠の短縮という現象がある。

枠の短縮には2つの種類がある。1つは**枠外配置** (Ausklammerung) であり、本来なら枠内に置かれるはずの文成分が動詞第二成分の後ろ、つまり後域に移される現象を指す。この場合、動詞第二成分までの文の緊張 (Spannung)<sup>16)</sup> が後域においてもまだ続いていると見なされ、それ故、動詞第二成分と後域の間にコンマは置かれない。もう1つは、後からの**言い足し** (Nachtrag) である。これは新たな句の開始と見なされるので、動詞第二成分と後域の間にコンマ - 会話においてはポーズ - が置かれる。

枠の短縮は、基本的には随意的な現象であり、そういう配置を取らなければならないという拘束力を持つものではない。しかし、ある種の文成分は、枠外に置く方が普通、或いは**枠外に置かなければならない**こともある。これに属するのは、① zu- 不定詞句の形を取る目的語、② 従属文の形を取る目的語・状況語、③ 比較の対象を表す成分である。

① 本来なら枠内に入るはずの目的語が **zu- 不定詞句** に拡張された場合：

(90) Er hat erst gestern angefangen, sich auf die Prüfung vorzubereiten.

(91) Ich habe von ihr verlangt, mir sofort das Buch zurückzugeben.

② 本来なら枠内に入るはずの目的語・状況語が**従属文**の形に拡張された場合：

(92) Er *hat* mir erst gestern *gesagt*, daß er auch mitkommen möchte.

(92a) \*Er *hat* mir erst gestern daß er auch mitkommen möchte *gesagt*.

(93) Er *ist* gestern nicht *gekommen*, weil er die Hausaufgaben nicht gemacht hatte.

(93a) \*Er *ist* gestern weil er die Hausaufgaben nicht gemacht hatte nicht *gekommen*.

(93b) Er *ist* gestern - weil er die Hausaufgaben nicht gemacht hatte - nicht *gekommen*.

③ als, wie 等に導かれる**比較の対象**：

(94) Die Oma *stand* noch früher *auf* als Vater. (Oma, S. 14)

(95) ..., du *hast* doch *geschlafen* wie ein Murmeltier.

(Oma, S. 47)

このうち、①と②の枠外配置については2つの理由が考えられる<sup>17)</sup>。1つは、枠が脆弱である為、負荷能力 (Tragfähigkeit) が低いことである。もう1つは、中域に多くの (長い) 成分が現れ、長くなり過ぎてしまうこと、それ故、中域において情報過多が生じ、動詞第二成分に至るまでの緊張を持続し得なくなることである。

尚、①と②のケースは、枠外配置・言い足しを問わず、主文と不定詞句・従属文の間に義務的にコンマが置かれる。

上記①・②・③のケースは、既に文法上の規範として定着しているので、強調等の文体的効果を伴わない。これに対して、前置詞句が枠の外に置かれている以下のケース<sup>18)</sup>においては、当該の句が重要でない事柄を一応付け足すためのものと見なされるか、或いは逆に、極めて強調・重視されることになる<sup>19)</sup>。

前置詞句のうち状況語であるものは、前置詞付き目的語より - 両者の区別については1.3の⑤を参照 - 枠外に置かれやすい。(96)、(97)、(98)では時を表す (前置詞付き) 状況語が、(99)、(100)、(101)では場所・方向を表す状況語が枠の外に置かれている。

- (96) *Wie soll ich ihn finden in der Nacht?* (L.Rinser)
- (97) ..., sie überdachte auch, *was er ihr gesagt hatte bei ihrem letzten Besuch.* (A.Seghers)
- (98) *Als er sich verabschiedete nach einem abgekürzten, bedrückenden Aufenthalt, ...* (A.Seghers)
- (99) ... ich *hörte* die Schwingen unsichtbarer Zugvögel *rauschen hoch über mir in der blauen Luft, ...* (L.Rinser)
- (100) Einmal *habe* ich das *gesehen, vom Fenster meines Bungalows aus ...* (S.Zweig)
- (101) Thomas *ging* allein und schweigend an uns allen *vorbei ins Haus.* (L.Rinser)

次の例の様に、2種類の状況語（場所と原因）が後域を占めることも可能である。

- (102) Und einmal *hat* Leni ein Stück Brot *gestohlen beim Bäcker vor Hunger.* (L.Rinser)

また、(103)、(104)、(105)の例が示す様に、前置詞付き目的語も枠外に現れ得る。

- (103) Den ganzen Tag *habe* ich *gewartet auf Ihr Singen.* (L.Rinser)
- (104) ..., *daß* Jan *lachen würde über dieses Bild, ...* (L.Rinser)
- (105) *Hast* du es anders *erwartet von einem Mann?* (L.Rinser)

しかしながら、どの前置詞句も枠外に置かれ得るわけではない。(106)の方向を表す(前置詞付き)状況語、(107)、(108)の前置詞付き目的語は、枠外に移されると、当該の文が非文法的になってしまうのである。

- (106) *Als* ich sie *in den kalten Keller legte, ...* (L.Rinser)
- (106a) \**Als* ich sie *legte in den kalten Keller, ...*
- (107) *Als* sie ihn *mit einem Vogel verglich, ...* (L.Rinser)
- (107a) \**Als* sie ihn *verglich mit einem Vogel, ...*
- (108) *Wenn* sich die Leute nur endlich *an die Verkaufszeiten halten würden, ...* (L.Rinser)
- (108a) \**Wenn* sich die Leute nur endlich *halten würden an die Verkaufszeiten, ...*

上の様な実例、及びそれに対する置き換え操作の結果から判断すると、前置詞句に関する枠の短縮は、現代ドイツ語に定着し、文法上の規範になったとは（まだ）言えないようである。

この言語事実に統語論的な理由付けを試みるとすれば、枠の短縮を伴う文の（非）文法性を、当該の前置詞句と動詞との結び付きの強さに還元することが考えられる。即ち、(96) から (105) までの文において枠外に置かれている成分は、動詞との結び付きがそれほど強くないので、省略されても文の正しさが損なわれないという性質を持っている。一方、(106)、(107)、(108) に現れている前置詞句は、動詞との結び付きが非常に強いいため、省略されると文が非文法的になってしまうという性質を持っている<sup>20)</sup>。しかし、こうした説明によって全てのケースが説明されるわけではない。例えば (109) における前置詞句は、動詞との結び付きが強いにもかかわらず、枠の外に置き得るのである。

(109) Wir *haben* nicht mehr *gerechnet* mit Ihrer Hilfe.

それ故、Engel (1988 : 317) は前置詞句を意味の上から分類することによって、枠の外に置き得る成分・置き得ない成分の策定を試みており、例えば、様子を表す状況語は枠の外に置けないとしている。

(110) \*Sie *haben* die Wohnung *eingrichtet* mit großem Geschick.

この点に関しては、今後更に詳しい研究が必要である。

枠の短縮は、中域における情報過多を防ぎ、伝達内容をより理解しやすい形で伝えることを可能にするので、書き言葉より話し言葉に多く見られるということは、容易に想像されよう。しかし、一方では、この想像が事実と反することを示す統計調査もあり、それによれば、話し言葉においても書き言葉においても、ほぼ25%~30%の割合で枠の短縮が現れるということである<sup>21)</sup>。この点について正しい判断を下すには、時代・作家・テキストの種類等の要因を考慮した精密な調査が必要であろう。

本章の最後に、1. 2 で示唆した述語内容語を動詞第二成分として扱うことの妥当性について一言触れておく。動詞 *sein* を用いた等置構文 “A ist B.” において、次の二通りの語順が許されるのは、(111a) が、基本

語順を持つ (111) の前置詞句を枠外に配置したヴァリエーションであると見なされるからである。そして、その様な捉え方をするためには、述語内容語が動詞第二成分であり、枠が形成されているということが前提となる。

(111) Ich *bin* auf meine Universität *stolz*.

(111a) Ich *bin stolz* auf meine Universität.

一方、次の (112a) が許容されないのは、前置詞句ではなく、3 格目的語が枠外に置かれているからである。

(112) Ich *bin* meinem Vater *ähnlich*.

(112a) \*Ich *bin ähnlich* meinem Vater.

述語内容語に動詞第二成分としての地位を認めることにより、(111a) と (112a) の文法性の違いを統一的な形で説明することが可能になるわけである。

#### 4. おわりに

以上、現代ドイツ語における文成分の配列を - 中域を 1 章で、前域を 2 章で、後域を 3 章で - 記述してきた。出来るだけ包括的に記述したつもりではあるが、残された問題もある。先ず、枠の短縮については、これまで十分な記述が為されているとは言えない<sup>22)</sup> ので、これを更に精確に捉えることにより、後域を正しく、より有効に使えるようにすることが必要である。それから、本稿では前域が副文で占められるケースをとりわけて考察しなかったが、それは、副文が基本的には名詞句等による文成分の拡張と捉えられるからである。しかし、主語や目的語が副文の形を取って現れる際に主文に置かれ得る、或いは置かれなければならない相関成分 (Korrelat) については言及すべきであったかも知れない。

その他、前域・後域両方に関わる Herausstellung という現象がある。

(113) *Der Wein aus Bad Dürkheim, der ist aber gut.*

(114) *Du und ich, wir werden es schon schaffen.*

(115) *In Mannheim, da haben wir zwei Jahre gewohnt.*

(116) **Dann** müßten Sie uns einmal besuchen, *bei schönem Wetter.*

(117) Wir werden **sie** nie vergessen, *die Julia.*



ており - (a)、(b)、(c) - 、①と③には願望文も現れる - (d)、(e) - 。また、①に属する決定疑問文の形を取ってはいるが、修辞疑問は意味上は平叙文と言えよう - (f) - 。

- (a) Habe ich aber viel gegessen!
- (b) Welch ein Glück ist das!
- (c) Wie du aussehst!
- (d) Hätte ich doch bloß mehr Zeit!
- (e) Wenn ich doch bloß mehr Zeit hätte!
- (f) Na, gibt's denn sowas? (= Sowas gibt es nicht.)

しかし、この様な分類は本稿における論考にとって重要ではないので、本文で行なっている一般的な分類で充分であろう。

- 6) この事は、日本人著者による文法書の大半に共通して見られる傾向である。一方、ドイツ人著者による最近の文法書においては、述語内容語が本稿で言う動詞第二成分として捉えられている。Flämig (1991:227)、Helbig/ Buscha (1984:567)、Hentschel / Weydt (1990:384)、Sommerfeldt / Starke (1992:249)、Weinrich (1993:36)等を参照。
- 7) 文頭の\*印は、当該の文が文法的に正しくないことを示す。これ以降の例文に関しても同様である。
- 8) Eisenberg (1989:420ff.)、Lernerz (1977:30ff.)を参照。
- 9) 但し、3格目的語と4格目的語の場合は、強調する等の理由で、「人」を表す3格が「物」を表す4格の後ろに置かれることが可能である。例文(5)、(6)を比較参照。
- 10) この区分に関するより詳しい記述は、「結合価と基本文型－発信型ドイツ語文法の試み(Ⅱ)－」(『同志社外国文学研究』第70号掲載予定)を参照。
- 11) 久野(1978:54)にも同様の指摘がある。
- 12) Thema、及びその対概念である Rhema の捉え方は研究者によって様々であるが、大きく2つに分けることが出来よう。① Thema は状況や(言語的)先行文脈から推測される既知の情報を表し、Rhema は新しい情報を表す。② Thema は伝達の主題であり、Rhema はその主題に関して伝えられる事柄を表す。この2つの解釈は、重なる部分があるにせよ、全く同一のことを意図しているわけではない。本稿での Thema の捉え方は、②の解釈に沿ったものである。この他、文頭の成分を Thema とする捉え方や、Thema・Rhema を厳密に二分することは出来ないとして、伝達価値の高低の差によって両概念を段階的に区別する考え方もある。詳しい規定については Beneš (1971:163)、Bußmann (1983:541f.)、Eroms (1986:12ff.)、Lewandowski (1985:1124ff.)等を参照。



- 13) Rall/Engel/Rall (1985 : 165) を参照。
- 14) つまり、主語の名詞句を Rhema 化するということである。Rhema については註12) を参照。
- 15) 北原 (1981 : 263ff.)、国立国語研究所 (1951 : 18ff.)、松村 (1988 : 1905) を参照。係助詞「は」の機能を詳しく論じたものに三上 (1969) がある。
- 16) Drach (1963 : 41) 以降、枠構造はしばしば緊張の場 (Spannungsfeld) と呼ばれる。即ち、枠の開始と共に聞き手の心の中に心理的緊張が生じ、それは文末に向かって高まってゆき、最後に動詞第二成分または定動詞が現れ発話が完結することによって解消するというものである。Weinrich (1993 : 30) も参照。
- 17) Drach (1963 : 45) が挙げている「意味の明確な枠構造文であるための必要条件」、及び Sommerfeldt /Starke (1992 : 253) を参照。
- 18) ここに挙げる例文は主に Sommerfeldt /Starke (1992)、橋本 (o. J.) による。
- 19) 前置詞句の枠外配置であっても、同種の句が幾つか連なり長くなっている場合 (Reihung) や、関係文等の長い修飾語句を伴う場合は、強調という効果を持たないことがある。
- (a) Der Schiffsverkehr mußte gestern eingestellt werden, zuerst auf der Oder, dann auf der Havel, schließlich auch auf der Elbe.
- (b) Alles hat angefangen an dem Tag, an dem der Mann zum ersten Mal seine Freundin besucht hat.
- 20) Engel/Schumacher (1978 : 18ff.)、橋本 (1985 : 2ff.) を参照。
- 21) 枠の短縮が話し言葉により多く見られるとするのは、Erben (1980 : 278)、Sommerfeldt/Starke (1992 : 254)、Weinrich (1993 : 85) 等である。  
一方、枠の短縮が必ずしも話し言葉だけの特徴ではないとするのは、Engel (1970 : 56)、Rath (1984 : 1656) 等である。
- 22) この様な指摘は Engel (1988 : 316)、Sommerfeldt /Starke (1992 : 254) にも見られる。

#### 例文の出典 (本文中に用いた略号を括弧内に挙げる)

Brüder Grimm (1819): *Kinder- und Hausmärchen*. München. Nachdruck 1984. [KHM]

Ende, M. (1960) : *Jim Knopf und Lukas der Lokomotivführer*. Stuttgart. [Jim]

- Härtling, P. (1988) : *Oma*. München. [Oma]  
 Kästner, E. (1928) : *Emil und die Detektive*. Hamburg. [Emil]  
 Nöstlinger, Ch. (1984) : *Geschichten von Franz*. Hamburg. [Franz]  
 斉藤 惇夫 (1978) : 『グリックの冒険』. 講談社文庫. [『グリック』]  
 灰谷 健次郎 (1974) : 『兎の眼』. 新潮文庫. [『兎』]

### 参考文献

- Beneš, E. (1971) : Die Besetzung der ersten Position im deutschen Aussagesatz. In : *Fragen der strukturellen Syntax und der kontrastiven Grammatik*. (= Sprache der Gegenwart 17). Düsseldorf, S.160–182.
- Bußmann, H. (1983) : *Lexikon der Sprachwissenschaft*. Stuttgart.
- Drach, E. (1963) : *Grundgedanken der deutschen Satzlehre*. Darmstadt. 1.Aufl.1937.
- Duden (1984) : *Grammatik der deutschen Gegenwartssprache*. Mannheim/Wien/Zürich. 1.Aufl.1959.
- Eisenberg, P. (1989) : *Grundriß der deutschen Grammatik*. Stuttgart. 1.Aufl.1985.
- Engel, U. (1970) : Studie zur Geschichte des Satzrahmens und seiner Durchbrechung. In : *Studien zur Syntax des heutigen Deutsch*. (= Sprache der Gegenwart 6). Düsseldorf, S. 45–61.
- Engel, U. (1988) : *Deutsche Grammatik*. Heidelberg.
- Engel, U. / H. Schumacher (1978) : *Kleines Valenzlexikon deutscher Verben*. (= Forschungsberichte des Instituts für deutsche Sprache 31). Tübingen. 1.Aufl.1976.
- Erben, J. (1980) : *Deutsche Grammatik. Ein Abriß*. München. 1. Aufl. 1972.
- Eroms, H. -W. (1986) : *Funktionale Satzperspektive*. (= Germanistische Arbeitshefte 31). Tübingen.
- Flämig, W. (1991) : *Grammatik des Deutschen. Einführung in Struktur- und Wirkungszusammenhänge*. Berlin.
- Helbig, G./ J. Buscha (1984) : *Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht*. Leipzig. 1. Aufl. 1972.
- Hentschel, E. / H. Weydt (1990) : *Handbuch der deutschen Grammatik*. Berlin.

- Kaneko, T. (1987): Die Partikel *wa* und ihre deutschen Entsprechungen. In: Kaneko, T. / G. Stickel (Hrsg.): *Syntaktisch-Semantische Kontraste*. (= Deutsch und Japanisch im Kontrast 4). Heidelberg, S.339–380.
- Lenerz, J. (1977): *Zur Abfolge nominaler Satzglieder im Deutschen*. (= Studien zur deutschen Grammatik 5). Tübingen.
- Lewandowski, Th. (1985): *Linguistisches Wörterbuch. Band 3*. (= Uni-Taschenbücher 300). Heidelberg /Wiesbaden. 1. Aufl. 1974.
- Rall, M. / U. Engel/ D. Rall (1985): *Dependenz-Verb-Grammatik für Deutsch als Fremdsprache*. Heidelberg. 1.Aufl.1977.
- Rath, R. (1984): Geschriebene und gesprochene Form der heutigen Standardsprache. In: Besch, W./ O. Reichmann/ S. Sonderegger (Hrsg.): *Sprachgeschichte. Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung*. Berlin /New York, S. 1651-1663.
- Sommerfeldt, K. -E./ G. Starke (1992): *Einführung in die Grammatik der deutschen Sprache*. Tübingen. 1.Aufl.1988.
- Spennemann, K. (o.J.): Die Satzstellung im Hauptsatz. Kyoto. (unveröffentlicht).
- Weinrich, H. (1993): *Textgrammatik der deutschen Sprache*. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich.
- 有田 潤 (1988): 『ドイツ語学講座 Ⅲ』. 東京.
- 北原 保雄 (1981): 『日本語の文法』. (= 日本語の世界 6). 東京.
- 久野 暉 (1978): 『談話の文法』. 東京.
- 国立国語研究所 (1951): 『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』. 東京.
- 小坂 光一 (1992): 『応用言語科学としての日独語対照研究』. 東京.
- 橋本 兼一 (1985): 「ドイツ語の基本文型—Valenz 理論からのアプローチ」. 『ドイツ文学語学研究』 9号、S.1-17. 所収.
- 橋本 兼一 (o. J.): 「前置詞句の枠外配置」. 東京. (unveröffentlicht).
- 松村明・編 (1988): 『大辞林』. 東京.
- 三上 章 (1969): 『象は鼻が長い』. 東京. 初版1960年.